

自宅警備員の日常

黒樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはとある自宅警備員の人生の一部。

きつとその先には幸福が待ち受けているはず……。

目次

自宅警備員の日	1
不可侵領域の侵入者	11
崩壊の序章	21
白い薔薇の棘	32
あなたと出会った場所	40
自宅警備員と新入り	49

自宅警備員の日

自宅警備員の朝特有の騒々しさ故に眠りを妨げられる事から始まる。

出勤・通学を控えた家族の足音と、騒々しいまでの話し声。それによって眠りを妨げられた僕は気分が悪い。今から時間を浪費しに行く家族達を尻目に二度寝する背徳感
は、少し罪悪感すら覚えるが僕はそれを無視せざるを得なかった。

僕が自宅警備員になって……何年だろう。

未だ僕はこの罪悪感から逃れられそうにはない。

きつと、罪悪感さえ失くしてしまえば、僕が僕ではなくなる。

そんな予感がして、人として大事なことを捨てられないまま。

開かないドア越しに家族の声を聞く。

「じゃあ、奉太郎君。私も仕事に行ってくるから。お昼は冷蔵庫の中に入ってるから
ちゃんと食べてね」

出勤前の母親は毎日、こうして声を掛けることを忘れない。遅刻しそうになっても、
一度も欠かしたことはない。

しかし、母親といえど実の母親ではない。血の繋がらない義母で父親の再婚相手だ。いい歳してみつともなく家に引き籠っている僕をどう思っているのか、それだけ言うと足音は遠ざかりパターンと玄関のドアを閉める音だけが響いた。

「……」

ただ一人、そんな音を聞きながら僕は眠りにつく。

本格的に自宅警備員である僕が目覚ますのは昼前、特に家族が家にいない時間帯だ。この時間帯だけは自由に家の中を移動できる至福の時となる。用意された食事を摂り、食器を片付け、証拠の隠滅を図る。自分が活動していたという痕跡を残すのが嫌な僕は毎回こうして戸棚に食器を戻していた。

「さて、今日はどうするかね」

時間を浪費すること数年、ただ普通に生きていることさえ飽きてきた。ゲームや漫画を最初の数年こそ楽しませてくれたがマンネリ化は良くない。そして、その都合上行き着いた趣味とは。

「今日もネット配信でも始めますかね」

孤独を埋めるための、虚構の戯れだ。

二階に戻るとすぐに機材を引っ張り出しセットする。染み付いた動作を慣れた手つ

きで終わると配信開始、とは言うが僕は出演するわけではない。顔出しNGなのだ僕は。

映すのは、ベランダに干された洗濯物。

誤解のないように言っておくが僕の趣味ではない。

あくまで視聴者の要望と都合に沿ったものだ。

じゃなきゃ、いくら狂っていてもそんなことできるはずもない。

『お、人生における圧倒的敗者自宅警備員の配信が始まった』

『待ってました』

『今日のパンツは何色ですか』

『アツプはよ』

配信開始から数十秒、すぐに千人近くの暇人……もとい変態紳士が集まった。

「いつも通り自分には出演しませんので今日のパンツでも勝手に眺めててください」

挨拶代わりの放置宣言にコメント欄は歓喜する。

こいつら、洗濯物——女性用下着——が見たいだけなのだ。

必要のない男、それが僕。

『本体はいつも通りパンツか』

だが、眼鏡が本体のキャラみたいに言われるとそれはそれでムカつく。

『そして、今日も自宅警備員は優雅に紅茶を嗜みながらパンツを眺めるのだった……』
『字面だけ見るとひでえな』

勝手にコメント欄がナレーションを入れてくるが全力無視。

それに反発するのは、違う視聴者——もとい変態紳士。

『違うんだ。オレ達はパンツを眺めているだけに見えるがそうじゃない。パンツを下着泥に盗まれないように見張るといふ崇高な目的があるんだよ』

『いや、嘘つけ。パンツ見たいだけだろ』

『アーカイブ見ろよ。マジだぞ』

『あー、あの伝説の初配信？ゲーム配信してたら、隣の部屋から物音が聞こえて見に行ったら下着泥が侵入してたっていう……』

『しかもちゃんと撃退したんだよな。……妹のパンツ顔に被って』

『何をパニックったか知らないが、下着泥も仰天するわ』

『下着泥に行ったら同業者がいるんだもんな』

『なお、自宅警備員さんは後にこう言っている。配信で顔を映すわけにはいかなかったと』

『いや、配信切れよ』

『だけど、結局のところ油断させて捕まえるには同じ土俵に上がるしかないんだよな』

……パンツ被るか目出し帽被るかの二択』

『非力なのが自宅警備員の辛いところ』

『それも警備員の意味ないじゃん』

『馬鹿野郎、オレ達に戦闘力があるわけないだろう』

『そう考えると、この人は我らの鑑よな』

瞬く間に荒れるコメント欄を眺め、僕は青空を見上げた……なんて面白い奴らなのだろうと。

『じゃあ、いつも通り始めるか』

『あのゲームを今日もやるのか……』

そして、配信中恒例となっているのが……。

『へい変態兄貴、的をプリーズ』

「え、また。まあ、金くれるんならいいけど」

下着値段当てゲーム……という名の投げ銭だ。

「じゃあ、あの左の黒いやつ」

パンツを指定するといつも通りコメント欄がざわつき始める。

『・2980』

『・5860』

『・7980』

『今日のパンツ代です。・20000』

『これで妹さんにパンツを買ってあげてください。・5000』

『むしろパンツ売ってくれません?・5000』

途中から変なコメントが流れたが、僕は領くわけにはいかない。

「義妹とはいえ下着プレゼントなんてしたら社会的に死ぬわ。今でもグレーゾーンなの
に」

これは秘密の配信『変態紳士の茶会』なのだ。いくら金になるとしても、パンツを売るのは心苦しい。そこまで落ちぶれてはいない。

『あの……ここでもいろんな相談をやってると聞いてきたんですが』

と、そんなバカみたいな話をしている間に新規のお客さんだ。

『やってるよー』

『下着配信してるような変態だが、本当のメインはこっちなんだぜ』

『まあ、オレらはパンツ見に来てるだけだが』

『ちなみに評判はそこそこいい』

『元教師らしいからな』

『元教師がパンツ配信なんて世も末だな』

『でも、汚職なんて早々珍しいことでもないだろ』

散々言われているが、結局は変態達なのでスルーした。

「相談なら受け付けてるよ。ここで話せないなら他で話すけど」

『あ、大丈夫です。此処で』

そうして、相談者は書き込み始める。

こういう時だけ変態紳士どもはコメントを止める。

『実は私、学校でいじめられていて……もう、嫌なんです。これ以上続くとどうにかなくてしまいそうで』

「何をされたか具体的に話せる？」

『……教科書破られたり、靴を隠されたり、お弁当を棄てられたり、水を掛けられたり。最近は暴力が多くなっています』

「君は何年生？」

『……高校一年です』

「言っておくが僕は何もできないよ。僕に出来るのは話を聞くことだけだ。それでも一つ、アドバイスをしよう」

『アドバイスですか……？』

「これは僕の自論なんだが。自分が傷ついて我慢するくらいなら、いつそのことやり返

せ。いいかい相手が君に強いているのは理不尽だ。お前が悪いなんて都合のいい言い訳でしかない。虐められる人間が悪いだなんて僕は思わないよ。虐めとは本来あつてはいけないものだ。どうせ傷つけられるくらいなら、精一杯争えばいい。君を傷つける分だけ仕返されることを教えれば、きつと虐めはなくなるよ」

そこまで言い切るとコメント欄が復活する。

いつもの変態紳士達だ。

『元教師の言葉とは思えねえなあ……』

『いやまあ納得はするけども』

『※個人的感想によるものです』

『やり返すのは悪いことだって言う癖に、そいつらは何もしてくれねえからなあ』

『そういう意味では変態兄貴はオレらの味方』

結局、どうするかは自分自身で決めなければならぬ。相談者がどう判断したかは知らないが、それが出来たら相談には来ていないだろう。せめて後押しにでもなればと思ったが……。

『わかりました。戦ってみます』

どうやらやる気になってくれたようだ。

そうやって相談者を捌いているうちに時間は流れていく。

配信開始から一時間程、刻は動き出す……。

ガタゴトという妙な音がベランダの方から聞こえた。

視聴者達に緊張が奔る。

『……ついに来たか。奴が』

『見てろ相談者達よ。これが変態兄貴の見せ場だ』

ベランダの欄干に指が掛けられた。此処は二階、普通そんなところから指は飛び出してこないし、幽霊でもなければそれは確かに人のものである。そのまま確かめるようにゆっくりと顔を出した天辺は眩いほどの真っ平。禿げ面の中年オヤジが姿を表した瞬間だ。そのまま下着以外は何も見えていないという風に洗濯物に手を伸ばし……。

「おい、何やってんだ？」

突然、聞こえた声に硬直した。

配信画面に現れたのは目出し帽を被った僕。

「な、いや、これは……!?!」

しかし、下着泥はびっくりすると欄干から手を離して転げ落ちていく。

「うおっ、あつ、ちよっ……!」

なんとか減速したものの屋根から転げ落ちた。

『はい。一名様ご案内』

『これで何人目だっけ？』

『六人くらい？これだからこれ見るのやめられないんだよな』

『てかあれ死んでね？大丈夫？』

『いや。主曰く、下には生垣があるらしい』

『まあ、死にはしないか』

——今日もまた一人、下着泥が逮捕された瞬間だった。

不可侵領域の侵入者

いつも通りの昼下がりにスマホにメールが届いた。連絡先を知る人間は極小数、家族と友人数名のみ。そんな中で平日の夕方に連絡してくるのは基本、家族だ。

『友達連れて行くから絶対に部屋から出てこないでよね!』

文脈から判る通り、義妹が友達を家に連れて来るらしい。僕はその間、極力存在そのものを消して不在を装えという意味なのだろうことがよくわかる文脈だ。

『おーい、手が止まってるぞ』

『どうした?』

『また空き巣(自宅警備員はいないものと数える)か?』

『緊急出動?』

ゲームの配信中スマホに意識が逸れたものだから視聴者達は騒ぎ始め、僕はその辺にスマホを放り投げながら返事をした。

「さつき義妹から連絡が来てさ。友達連れて来るって」

全く関係のないことなので無関心にそう言うと、変態紳士どもが騒ぎ立てる。

『面白いや義妹ちゃん何歳?』

『家族の話題に触れたことないよな』

『そういうのはご法度だからな』

『まあ、パンツには触れてるんだけどね』

『大抵こういう場合、部屋から出て来んなキモオタデブとか言われてさあ』

変態紳士の中にも経験者がいるようで共感しあったりしなかったり。

僕は幾つかの質問に答えることにした。

「義妹は大学生だぞ」

すると、コメントが沸き立つ。

『JD?』

『どうりで大人パンツ』

『いやまあ小学生じゃないのはわかってたけど』

『JKかJDの二択だったし』

『大穴で女子中学生だと思ってた』

義妹が大学生であろうとなかろうと僕には関係のないことなのでコメントに反応しづらい。そう思っていたら、とんでもないコメントが飛んできた。

『これは女子大生とお近づきになるチャンスでは?』

何がどうお近づきになるチャンスなのか小一時間ほど追及したいところなのだが、小一時間も追及している間に帰って来てしまうのでそれは却下だ。

「僕に女子大生とお近づきになってどうしろと?」

現実問題、女子大生とお近づきになるメリットがない。

『……そりゃあ、なあ?』

『実際、彼女とか欲しくないの変態兄貴』

そう言われても、現実的問題は解決していない。

「いやいや、僕がモテると思うか? 自宅警備員だぜ。家に引き籠もってパンツ配信したりしてるろくでもない人間だぞ。というかモテてたらこんなことしとらんわ」

思わず口調がおかしくなったが、自分で言つて悲しくなってきた。

「まあ、確かに彼女は欲しいと思うけども」

自宅警備員なんかの彼女になりたがる奴はいない。

よって、彼女を作ることは不可能と判断する。

『好きな人とかいたことないの?』

「んー、別に恋とかしたことはないかな」

小中高と一貫して友人とバカやって過ごした記憶ばかりで色恋にうつつを抜かした

ことは一度もない。そうはつきり断言すると失礼な言葉を頂いた。

『あれだね、枯れた青春送ってんなあ』

余計なお世話だ。

『気になる娘とかいなかっただん？』

「あー、気になる娘なら一応いたけど。うちのクラスに」

恋愛とは呼ばずともそれくらい経験なら誰にでもあるだろう。

そしたら、妙に変態紳士どもは食いついてきた。

『どんな娘？』

「一人は有名な財閥の令嬢だったかな。もう一人はちよつとやんちゃで不良ギャル娘って呼んでた」

浮世離れた美貌を持った白い女の子と金髪のギャル娘の姿が思い浮かぶ。懐かしさに少し胸が熱くなり、脳裏に過った考えをすぐさま振り払った。

もう僕には関係のないことなのだ。

感情に浸るなんて今更無意味だ。

『やめとけやめとけ、お嬢様とか自宅警備員兄貴じゃ釣り合わん』

『不良ギャル娘とか振り回されるのがオチだぞ』

『てか、対極すぎて草』

『どんなクラスだよ。キャラクター濃すぎるわ』

『いいなあ俺もそんな娘と同じ学校に通って青春を謳歌したかった』

『ダメ元で玉砕すればよかったのに』

散々な言われようだが、一つ訂正しておくことがある。

「いや、教師が生徒に告白はダメだろ」

その瞬間、画面にコメントが吹き荒れた。

『生徒w』

『気になる相手は教え子ってww』

『逆に学生時代はいなかったのかよ』

『解雇して正解だったな』

『通報しました』

『いや、その通報手遅れでは？』

『あ、そっか。変態兄貴やらかして此処にいるんだっけ』

今更、反論する気にもなれず普通に受け流す。

するとまた新たな質問が飛んできた。

『何があればあなたは社会復帰してくれますか？』

なんてことはない質問が、妙に心を擦った。

多分、変態紳士の殆どにクリティカルヒットした言葉ではないだろうか。

「そんなことができるなら苦勞はしないよ。でもまあ、そうだな……彼女の一人でもできたら考えなくもないよ」

冗談半分で笑い飛ばす僕は、きつと笑っちゃいない。



玄関のドアの開閉音が響く。義妹が「ただいま」と態とらしく声を掛けたのは僕への合図だ。つまり、今から友達が帰るまで出て来るなという命令であり、もし逆らえば……あとは想像にお任せする。

『あれが義妹ちゃんの声……ツン、ってしてデレってしそうな声だな』

声ソムリエの言った通り、僕と他者の扱いの差は酷いの一言で表せる。それもそのはずヒキニートの義兄を誰が敬愛しようか。顔を合わせれば汚物を見るような目で見られる。

「あたしの部屋はこっちだよ。美羽ちゃん」

瞬く間に義妹と友達が階段を上がって来た。そして、そのまま隣の部屋に入って行く。その前にぴたりと気配が止まった。ドア越しに視線を感じるのは気のせいだろうか。

か。

「ねえ、この部屋は？」

「あー、そこ？ 兄貴の部屋だけど……ロクデナシだし関わらない方がいいよ」

「えー、私挨拶したかったな」

「いや、ほら。今いないから。私の部屋行こつ」

「あれ？でも、お兄さん引き籠もっていて部屋から一步も外に出ないって——」

「きつとパチンコにでも行つたんだよ！」

どうやら気のせいではなかったようだ。義妹が焦つたように友達を連れ去つて行くまでの間、妙な緊張感に包まれていたがやつと心配が消える。義妹の部屋に移動したのだろう。しかし、危機は去つたとはいえまだ油断は出来ない。隣の部屋は義妹の部屋なのだから物音一つ立てれば存在に気付かれることになる。

「もういいか？ 配信切るぞ」

変態紳士達が少しでもいいから女子大生の声を聞きたいとか駄々を捏ねたので配信を切らずにおいたが、目的は達成された今余計なリスクは削ぎ落とすべきである。

そう思っていたのだが、妙にコメントが荒れている。

『あの声……まさか……！』

『Myu?』

『え、ミュウミュウ?』

『むっちや声似てたんやけど』

何に沸き立っているのか判らないが、消す前に疑問が出来た。

「誰?ミュウミュウって?」

何気ない一言にコメント欄が更に荒れる。

『え、変態兄貴ミュウミュウ知らない?』

『今、最も輝いているアイドル』

『トップオブアイドル』

『突如、デビューしてその歌唱力で爆発的人気を得た巷で噂のアイドルを?』

どうやら最近は『ミュウミュウ』なるアイドルが流行っているらしい。俗世と己を切り離すよりも遙か昔から、芸能人や流行りのバンドには疎かったためアイドルにはさっぱりだ。これがアニメや漫画の話ならついていけたのだが、もう既に変態紳士達が何を言っているのか判らない。

「そう。じゃあ、配信を終了します」

そう宣言した瞬間、コメント欄が大量の『待って!』で埋め尽くされた。

「今度はなに?」

何やら慌てているコメント欄に僕は冷めた目を向けた。

正直、コメントの量が多過ぎて見辛い。が、なんとか一つを解説に成功する。『後生です。どうか配信を続けてください！』

『一生のお願いでござる兄貴い！』

誰もが配信続行の嘆願である。

その理由は言わずもがな、さっきの声の主にあるのだろう。

「いや、おまえらさつき一生のお願いって言って義妹の声強請ってきたじゃないか。それに他人の空似だろう。よく考えろよ。自宅警備員の家にアイドルが来るか普通」

アイドルがうちに訪問して来るはずがない、と言うとコメント欄が鎮静化した。

『……確かに』

『いや、でも、もしかしたらそういう奇跡が起こるかもしれない』

『自宅警備員の配信だし』

『下着泥が来るんだ。アイドルが来る可能性だってある』

夢見がちな変態紳士達をどう論破したものか困っていると、妙案が一つ浮かんだ。

「おまえらが就職するような確率だぞ」

変態紳士の一部がどれだけニート歴を築いていようが想像も出来ないが、一旦コメント欄が静止した。

『……確率はゼロか』

『ゼロではない。ゼロに等しい数字』

『実質ゼロじゃねえか』

『働き口がねえんだから仕方ねえ！』

『探さないだけだから、可能性がないわけじゃないんだ』

言い分は様々だがようは可能性は無いに等しい、ということまで最終決定が下される。

「というわけで切るぞ」

配信画面を終了しようとした時、物音が鳴った。

どうやら隣の義妹の部屋から誰かが出て来たらしい。

「——失礼します」

そして、そいつは僕の部屋にノックもなしに侵入した。

崩壊の序章

その侵入者を一言で表すのなら春の桜。淡い桜色の髪は綺麗に梳かされサイドテールに結えられている。体軀は細身で引き締まっているように見えながらも、女性らしい柔らかさが胸やお尻にあった。

全体的に見て、美少女——そんな女性が僕を見て儂げに笑顔を浮かべた。天使の微笑とはまさにこのことで並大抵の自宅警備員なら速攻で恋に落ちただろう。僕は分を弁えているのでそんなことはないが。

『妹突!?!』

『いや、これはさつきのお客様』

『つまりミュウミュウ!?!』

『放送事故確定回かな?』

逃げるようにパソコンのディスプレイに視線を泳がせれば、変態紳士どもは歓喜し好き放題にコメントを投げていた。しかも、今までで一番の投げ銭付きである。

「——ようやく会えたね。先生」

侵入者が発した言葉によって僕は強制的に意識を引き戻された。

「……先生？」

「あれ、あたしが誰だかわかりませんか？」

言われて記憶を探ってみるが桜色の髪の子学生徒に心当たりはない。こんな印象的な娘なら覚えてはいるはずだが、皆目見当もつかなかったのが本音だ。

「あー、人違いじゃないか。教師をやっていたけど一年そこらだし」

それに火を焚いて、煙のように去った教師を覚えているはずがない。

覚えていたとしても、きつとろくでもない記憶だろう。

「間違い無いですよ。先生は先生です。黒崎奉太郎。あたしが世界で初めて好きになった人です」

——その名は、間違いなく僕のものだった。

「先生。あたし、高校の時、先生のこと大好きだったんですよ。もちろん、今でも大好きですけど」

ゆっくりと歩み寄った侵入者は顔を近づけると耳元でそう囁いた。部屋だけではなく、心まで侵入されそうになってまるで早鐘を打つように心臓は鼓動を早めた。

『ぬ、主？』

『この反応は……』

『——パターン愛』

『使徒です!』

『逃げて変態兄貴!?!』

『ダメです応答ありません!』

『エヴァアーニート兄貴、精神攻撃を受けています』

『まさかトラウマを引き起こそうというの?今すぐ回収して!』

『もう既にやっています』

『第一口ツク解除——失敗です』

『何者かに妨害されています!』

『ふふ、逃げる場所なんてないくせに』

『逃げちやダメだ。逃げちやダメだ逃げちやダメだ』

『ハローワークから逃げちやダメだ』

『ぐああああああああ!?!』

『これは……まさか!?!…暴走ツ!?!』

『いや、違うだろ』

『ちよつと待つて。さつきから楽しいところに水を差すやつ誰?』

『ハローワークネタで既に半数が死滅したぞ』

『ちよおつと邪魔な人達には黙っておいて貰いました』

『なにやつ?』

『ふふつ、先生の愛人、とでも言っておきましようか』

『たまーにいるんだよなー。変態兄貴の熱狂的ファン』

『愛人って言ったやつは初めてだけど』

「——げつ、やば、翔子ちゃん気づいちゃった?」

「——っ!?!」

気がつけば繋いだままの配信画面が大暴走を引き起こしていた。しかし、そつちにかまっている暇はない……というか助けを変態紳士達に求めたかったが役に立ちそうにはなかった。

「翔子……白崎翔子のことか?」

不意にスマホの画面を見て誰かの名を呼ぶ侵入者に振り返り、そう聞くと彼女は不機嫌な表情になる。

「へえー、翔子ちゃんのこととはわかるのにあたしのことはわからないんだ」

こんな特徴的な髪色なら思い出せないはずはないのだが、該当する人物は一人もいないというのが記憶からの検索結果だ。顔を照合しようにも何故か顔だけは思い出せない

い。白い靄が掛かったように顔だけが隠され、ぼんやりとわかるのは髪色だったりどんな感じだったかとか抽象的な印象ばかり。

「名前を言えばわかるんだけどな」

「残念ながら今は言えないかな。先生には自力で解いてもらいます。これ、宿題ね」

そうやってはぐらかす笑顔が誰かに重なって見えた。

今のは……誰だ？

忘れかけていた記憶が蘇るような感覚。

でも、最後まで思い出せないもどかしさに頭がどうにかなりそうになる。

「大丈夫だよ先生。あたしは先生の味方だから」

すっと腕を伸ばされて抱き締められる感覚。気がつけば顔いっぱいになり柔らかいものが触れていて、何処か安らぐような錯覚さえ覚えて身体から力が抜けた。

「あ、そうだ先生、連絡先の交換しよ」

強引なまでの気軽さで連絡先が交換される。抵抗する間も無く登録が終わってしまった。登録名を見てみたが、本名ではなく『Myu』という名で登録されている。これでは正体を暴くことができない。

「ふふっ、これでいつでも先生と連絡が取れるね」

何やら喜んでいる様子だが、何が何だか判らなかつた。

今度は違うスマホを見ている。まさかの二台待ちだ。

「——わかってるよお。はいはい、今日はこの辺で失礼しますよ」

誰かに何かを送って立ち上がる。

「それじゃあまたね。先生」

嵐のように来た女性は、嵐のように去って行った。

「なんだったんだ……?」

仮定『Myu』と名乗る女性が去って五分ほど、ようやく変態紳士どもの方も落ち着いて来たらしい。誰かと論争をしていたが敗残兵のようにコメントが流れる速度が遅い。相当ボロクソ言われたようで、心に傷を負った負傷者達が後を絶たなかった。

『つていうかさあ、これマジでミュウミュウだったらスキャンダルもんじゃね?』

その中でも比較的無傷だった変態紳士が放ったコメントに食いつく者達は、続けてこう放った。

『ミュウミュウじゃなくても女子大生のおみあしだけでも映してほしかった』

『それな。タイツでもいいから』

『ニーソでも可』

『自分は生脚派。変態兄貴は?』

突然、フェチを聞かれて反射的に答える。

「僕は生脚も好きだけど、断然ニーハイかな」

『さては変態兄貴、太腿フェチだな』

——否定はしない。

「嫌いではないな」

『誰だつてそう言う。俺もそう言う』

「ここで俺は——と何度目かわからないフェチ合戦が始まったが、僕は眺め見るだけで参加しなかった。さっきまでいた女性が気になって仕方なかったのだ。

『それで声ミュウミュウの女性と喋ってたみたいだけど、どんな容姿？美人？』

そのコメントに同調する質問が多数流れたことで、僕も確認したいことができた。

「美人だよ。凄く綺麗だった。髪は桜色で」

『ミュウミュウじゃん！』

『Myuだな。そんな髪色の日本人が二人もいるか』

『まあ、染めてるんだらうけど』

『俺らはミュウミュウの色に染められちゃまってるがな』

——すぐに解明されてしまったが。

「で、そのMyuってなに？」

『Myu』という人物ということは判明しても、それが何なのかはまるで判らないのだ。幸いにも詳しい変態紳士がいるようだから詳細を聞くと膨大な書き込みが投げつけられる。

『今年の四月にデビューした自称十九歳のアイドル』

『デビュー曲でミリオンセラーを達して、堂々の一位に輝いた伝説のアイドルですわ』

『知つての通り名前は「Myu」だけど、ミュウミュウって愛称で呼ばれてる』

『歌だけじゃなく、ダンスも別格に上手くてもはや異次元の存在』

『好きなものは「高校時代の恩師」で、とある番組初登場した時に小一時間ほど語つたとか……』

『……仮定、変態兄貴だとしたら謎が深まるばかり』

『さっきの反応といい事実だった可能性はあるけども』

『つていうか、変態兄貴が急にアイドルに興味示すの珍しいな』

『現実はクソだつて言つてたくせに』

これは言つていいのかダメなのかわからないが、僕はスマホを遠い目で見つめながら、

「……いや、なんか無理やり連絡先交換させられたんだけど」

そう告白すると、またコメントが荒れた。

『なんだその羨ましい状況!?!』

『アドレスは? 開示はよ!』

『いくら払ったら売ってくれる!?!』

『有り金全て持ってけ!』

いくらクズでも他人の連絡先を売つ払っちゃうのが良くないのはわかる。失礼な変態紳士達を無視してスマホで『Myu』と検索。すると出て来た写真を確認する。

「えー、マジかあ……」

そこに写っていたのはさつきまで部屋にいた張本人。ライブ衣装という衣装の違いはあれど、間違いなく彼女だと確信できるくらいには似ている。ていうか同一人物。

『変態兄貴、反応薄……!』

『俺なら泣いて喜ぶのに』

『もしミュウミュウが家凸してくれるんなら、就職でもなんでもやったるわ』

『一生来ないってそんな夢のような状況』

——さつき来たんだが。

『恩師とか大好きだとか聞こえたけどマジかミュウミュウ……』

『変態兄貴人柄だけはいいいから……』

『オレこの配信終わったら教員資格取るんだ』

『なんで?』

『先生大好きのところだけ切り抜いて延々とリピートさせる』

妙な発言をするのはいつものことだが、先に釘を刺しておかねばなるまい。

「んー、今回はアーカイブ残さないかな」

突然の決断にコメント欄が騒ついた。

『な、何故だ変態兄貴!?!』

『こんな神回またとないぞ!?!』

『配信者歴史に残る大快挙ですぞ!?!』

『せめて切り抜かせて!』

死刑宣告された囚人のような反応を見せるが、僕にだって正当な理由はある。

「教え子が頑張ってるのに邪魔はしたくないかなって。それに……僕が消さなくても、翔子が何か絡んでるだろうし」

白崎翔子とは僕の教え子の一人。そして、件の財閥令嬢が彼女だ。Myuというアイドルに関わっているのならスキャンダルの対策くらいしてるだろう。調べた結果、Myuの所属する事務所というのが彼女の家の傘下というのも気になる。下手したらウイルスでパソコンをぶっ壊すくらいしてくるだろう。

「今日の配信は終了しまーす」

僕は込み上げる懐かしさに少しだけ胸を締め付けられながら、ベッドに身を投げた。

白い薔薇の棘

『そういえばあれからどうなったん？』

今日も今日とてパンツの見張り番をしている時に飛んできたコメントの主語が迷子だったので、その意味を理解するのに数秒ほど。矢継ぎ早に出て来たのはMyuという名が続く。

確かにあれ以来、Myuは家に来ていない。来てはいないが僕の生活は既に汚染されていた。

毎日のように届くおはようメール、お仕事行ってくるね、大学行ってくるね報告、朝昼夜の食事報告、そして極め付けは無防備な風呂上がりの自撮り。そして、最後にお休み前の電話。

「おかげで僕の生活が規則正しくなっちゃったよ」

何度も何度も何度も一日にSNSで報告をしてくる上に、返信がなければコールされ、気がつけば生活習慣が汚染されているという傍迷惑な状況に僕は寝不足だ。あくま

で生活習慣は引き摺られただけで、治ったわけではないのだ。今も夜は遅くまで起きているしそこに朝早く起きる習慣ができていてだけで、遅寝早起きの状態である。

『つまり、変態兄貴はミュウミュウに朝起こしてもらって』

『毎日のように朝昼夜の食事を知り』

『分刻みにスケジュールを獲得』

『果てには、公式のエロ画像まで入手と』

『で、おやすみって言いあうんだろ?』

『なんて羨ましい』

『っーか、もう結婚しろよ』

『これは噂に聞く束縛系女子では?』

『束縛の意味が違うと思うが』

『じゃあ、逆ストーカー』

『逆ストーカーってなんだよww』

他人事だと思って変態紳士達はわいわいと談義しているが、冗談ではない。

『ミュウミュウの風呂上がりの写真欲しい!いくらですか?』

「売らねえよ」

独占とかなんとか言われたが全部無視。

そんな都合のいい言葉で騙されるほど、僕は耄碌していない。

「でも実際何もないよ。好きとか言われたけど、それって教師としてだろ？」

他意はなかった。いいなおまえら。

『朴念仁を演じる変態兄貴』

『実は気づいていながら、生徒を気遣う心』

『そこに痺れる憧れる』

『それがどうしてこんな底辺まで落ちてしまったのか』

あまりにもコメントが辛辣過ぎて、泣けてきた。

そして、またある日のこと。またいつものように写真が送られてきた。今度は誰かと一緒に写っているようだ。白い髪の微笑を浮かべる女性に心当たりがある。こんな気品の良さそうなお嬢様、世界中を探しても二人としない。

『白崎翔子か……?』

『そう。正解。翔子ちゃんも先生と連絡取りたいんだって。連絡先教えていい?』

答えるより早く、白崎翔子の連絡先が電波によつて発信された。特に困ることもないので連絡先を追加すると挨拶代わりのパンチが飛んできた。

『お久しぶりです先生。お元気でしたか?』

『白崎か。久しぶり。元氣そうでなによりだ』

『ふふ、そうですね。そんなことよりも私達の前から突然いなくなつて何をしていたかと思えば、義妹のパンツ配信なんて面白そうなことをしていますね?』

これには僕も硬直するしかない。僕の愚かな行いが全てバレているのだ。

『……なんか怒つてないですか白崎さん』

『昔は翔子つて呼んでくれたのに今は呼んでくれないんですね。全然怒つてませんよお。ただちよつと義妹さんにバラしてやろうかなと思つているだけで』

——少し根に持つてるじゃないか。

とはいえ、そんなことされたら家を追い出されるだけで済むかどうか。引きこもりのニートが家を追い出されると生きていけない可能性がある。幸いにもお金はあるけども。

『何が要求ですか?』

昔は模範的な善で教師や生徒からの評価が高い深窓の令嬢のような娘だったのに、どう教育すればこんなことになるのか僕は溜息を吐いた。まさか自分の教育が自らの首を絞めることになるとは想像もしていなかった。

早々に降参を認めて要求を聞くとスマホが振動した。直接電話を掛けてきたのだ。

「……はい、僕ですが」

『受け手がオレオレ詐欺とは斬新ですね先生』

開幕からの罵倒は彼女なりの挨拶だ。

本当に昔と変わらない、白崎翔子の声が聞こえた。

ああ、でも少しだけ大人になっただろうか。

少なくとも、罵倒のキレは増しているみたいだ。

彼女も日々成長しているらしい。

「そういう無駄話はいいから用件を言え」

『無駄話とは随分な物言いですね。先生と会話するこの一時でさえ意味のあるものですよ。私にとってこの時間はなによりも大切な日常の記録なんです。わかりましたか?』

——元生徒に説教されてしまった。

『でも、用件の方が大事なことなのでそちらの話に移りましょうか。先生、私と会ってください』

元生徒……所謂教え子ってやつからの要求に僕は少し胸が痛くなった。現状の僕は過去から現在まで省みるに人に誇れるとは言えない。人に会うことですら億劫で、何より元教え子に失望されるのは怖かった。手遅れっぽいが。

「……嫌だね。面倒臭い」

『先生は家にいるだけでいいんですよ。何が面倒なんですか』

確かにそれなら面倒な要素は一切ない。適当な言い訳を言い連ねても、結局は見透かされてしまう。果てには痺れを切らした翔子がとんでもない脅迫をかましてきた。

『本当に妹さんに配信見せちゃいますよ。いいんですか?』

再三にわたる脅迫に僕の心は揺らぐ。翔子は鼻屑目なしに言つて物凄い美人だ。そんな女性に会えることを本来なら喜ぶべきなのだろうが今は違う。僕のような人間とどうしてそこまで会いたがるのか。

「……わかった。降参だ」

「そうですか。無理強いは良くありませんからね。先生が了承してくれて嬉しいです」

電話に重なるように扉の裏から声が聞こえた。すぐに音を立てて扉が開かれ、そこにはMyuから送られてきた写真と同じ白髪碧眼の美しい女性が立っていた。

纏うブラウンのニットワンピースは彼女のグラマラスな身体のラインをより美しく見せるその姿は、かつてよりもより大人の女性らしさというのを纏っているように見える。

呆然としていたのか、見惚れていたのか、僕は数秒固まったまま彼女を見つめていた。

「……ふふっ、どうしたんですか先生?」

白崎翔子は悪戯っぽく微笑むとそう言つて僕を弄る。僕が見惚れていたのを見透かしたような目だ。このままではいけない。彼女に振り回される未来が待っている。

「よく言うな。脅迫したくせに」

「脅迫とは人聞きの悪い。これもまた先生の調教の賜物なんですけどね」

「紛らわしい言い方するな。教育と言え！」

——と、そこまで言つて気づく。

「……あいつは？」

隣に最初からいたのなら義妹もいて、さつきまでの会話が筒抜けだったのではないかと思つたが、彼女はあつけらかんと言いつ放つた。

「義妹さんならいませんですよ。今頃、大学の講義に出ているでしょうから」

「じゃあ、おまえどうやって入つたんだよ」

「鍵を借りました」

「は？」

いくらなんでも他人に鍵を貸すのは不用心ではないのか、と思つたが翔子は笑顔でこう付け足す。

「お兄さんを更生させると言つたら快く貸してくれました。お母様にも相談して、いつでも来ていいとお墨付きも貰いましたし」

当人の知らない間に僕の売買契約が結ばれていたようで、誇らしげな翔子の手にはスピアであろう家の鍵が握られていた。それはきつと自分の家などではなく、この家の

ものなのだろう。

「二応、言っておくがもう僕はおまえの担任じゃない。教師と生徒でもなければ無関係だ」

きつといつかは忘れるはずの存在でしかない。

そう言うと、揶揄うように彼女は言う。

「そうですね。もう私は先生の生徒ではありません。男と女です」

完璧に返されて一瞥した彼女の顔を見ると、唇が引き結ばれ艶かしく震えている。そう言うことに少なからずの羞恥心はあったのか頬は赤く染まっている。

——僕はそんな真つ直ぐな元教え子から目を逸らした。

あなたと出会った場所

その人と会話らしい会話をしたのはこの時が初めてだった。

「おーい、白崎翔子。進路希望調査票出してないのおまえだけだぞ」

二年二組の担任教師、黒崎奉太郎。黒髪黒眼で髪はボサボサ。格好良いとは言えない普通の顔の普通の教師だ。何処にでもいるように見えて噂ではその限りではなく、クラス谁也が認める優しい先生らしい。というのは風に聞いた噂のみで実際には会話しただことがないから彼のことは全く知らなかったのだ。

しかし、私にはもう一つの判断基準があった。一年生の頃、遅刻魔不登校で有名だった蒼山美羽という女生徒が突然、遅刻しないようになったのだ。これには私も僅かながらに覚えている。今年から担任になった黒崎先生に蒼山さんはベツタベタで一緒にいることが多いところも。

「すみません。……まだ、決まってるなくて」

進学するとして、何処の学校を受験するかも決まっていない。

そんな私に黒崎先生は言う。

「進学か？就職か？」

「……多分、進学だと思います」

「多分？」

黒崎先生は首を傾げる。

「おまえは将来、何がしたいんだ？」

「……」

私はその質問に沈黙するしかなかった。

私の人生は私が決めることじゃない。

これまで、ずっと両親が決めてきた。

進学する学校も、習い事も、生活のリズムも、許婚も。

自由な時間はなく、親の指示通りに生きてきて。

私は……。

「白崎グループの御令嬢は大変だなあ」

私の心の内にある感情を代弁するかのように黒崎先生はそう言って、私の前の席に座った。

「父親か？母親か？まあ、大方父親ってところかな。忙しいのは」

まるで分かり切っているような台詞に私は顔を上げた。

「なんでつて顔したな今。そりやあわかるさ。おまえ、ずっと両親の思うがままに我儘一つ言わず育ってきたんじゃないか？」

「……」

——凶星だ。悔しいけど、言い返せそうにない。

黒崎先生は机に進路希望調査票を置いて、コンコンと机を叩く。何が楽しいのかあの人は生徒と話す時はずっと笑顔だ。嫌味の一つ言われても嫌な顔一つしたことない。

「あのなあ白崎、進路希望調査票つてのは親の希望を聞くためにあるんじゃない。生徒の意思を確認するためにあるんだぜ」

「生徒の意思……？」

「そうそう。生徒の意思だ。将来の夢とか、行きたい学校とか、まあ色々だな。そしてこれは子供が親に自分のやりたいことを伝えられない時の最後の手段でもある」

「最後、ですか……？」

「最後つて言うのと少し大仰だけだな。でも、言葉で伝えられないことも手紙やなんかでは伝えられるだろ。初めて進路希望調査票を親が目にするのは一学期の三者面談だ。その時、教師は生徒の味方になってやるのが教師の役割だつて僕は思ってる」

黒崎先生の言っていることは筋が通っているような気がした。説得力があつて、耳触

りが良くて、ああどうしてあの子達が信頼を寄せるのか判ってしまふような気がした。この人はずっと生徒のことだけを考えているのだ。

見透かしたような黒崎先生の瞳が、私を映す。映った私は何処かちっぽけで幼児のようだった。

「かと言つてやりたいこともないんだろ。今は」

それだけ伝えると黒崎先生は立ち上がった。

「一学期の終わりまであと一月、ゆっくり考えろよ。待つてやるから」
教室を出て行く黒崎先生の背中を私はそつと見つめた。

——と、言いつつも黒崎先生は毎日私のところに来た。放課後になると甘いものを片手に私のところへ。ホームルームが終わった直後なのに一体そんな時間が何処から……。

「何か興味のあるものは見つかったか？」

ドーナツをもぐもぐと食べながら問い掛ける。

私が先生を見つめていると、先生は紙袋を差し出して、

「食うか？」

と、聞いた。

私は差し出されるままにドーナツを手取る。

一口噛んで、その甘さに驚いた。

「……意外に美味しいですね」

「お嬢様は有名チェーン店のドーナツすら食べたことないのかよ」

黒崎先生は私の私生活に驚いているようだった。

またある時は有名チェーン店のコーヒー。

またある時は有名チェーン店のハンバーガー。

またある時は屋台のお好み焼き。

またある時は屋台のたこ焼き。

またある時は餡のたっぷり入ったたい焼き。

またある時は……。

もう残すところ三日、一学期が終わる。

何度目かの黒崎先生との二人きりの時間は終わろうとしていた。

それでもまだ私は答えを見つけれないまま……。

気がつけば、何処かこの時間を大切にしている私がいる。

ふと、気になった。

「そういえば黒崎先生はどうして教師になったんですか？」

「ここまで熱心な教師は生まれてこの方初めて会った。それなりに理由があるのだろうと思つての質問に黒崎先生は適当な感じでこう答える。

「別に大した理由なんてねえよ」

「本当ですか……？」

「聞いたところで参考になんてならないぞ。くだらない理由だし」

まるで信じてはいない返しに黒崎先生は数拍黙り込み、ガシガシと頭を乱暴に掻いた。

「実は言うと先生、将来の夢とかやりたいこととか全くなくてな。どうしてもこの職に就きたいとかそういうった熱い理由なんてのは一つもなかったわけなんだけど」

「え、じゃあなんで教師に？」

益々訳が分からなくなった。

真面目な教師なのに、なりたい理由がなかったなんて。

「で、まあ、教師になった大雑把な理由なんだけど。やってみたいことはいくつかあったんだ。教師、自衛官、警察官、アニメーター、歌手とか色々な」

「なんというか纏まりないですね」

「でもまあ、歌手とか色々は才能云々の話だし諦めて。それ以外の候補から適当に見繕ってくじ作って引いたら教師引いたからやってみようかなって」

「本当にくだらない理由ですね」

でも、ならばなぜこの教師は一生懸命に生徒と関わるのか。より一層わからなくなる。疑問を覚えれば覚えるほど謎が深まるばかりで解決しない先生だ。

「そんな適当な理由で教師をやってるなら、もつと適当でも怒られないと思いますよ。他の人がそうなんだし」

「でも、ほら、やるからにはあれだ。ちゃんとやんなきゃいけないだろ」

「それにしたって黒崎先生の行動は不可解ですよ」

「そうかもな。これは勝手の僕のままさ。いつまでもやりたいことが決められず、適当な人生歩んできたからやりたいことがあるやつは好きに生きて欲しいっていう。勝手な押し付けだ」

最後の一言が妙に胸に染み渡る。

「黒崎先生は勝手ですね。生徒に何をさせたいんですか」

「見せて欲しいのさ。幸せになった生徒達の幸せな顔を」

「まるで自分は幸せになれないみたいない草ですね」

「いいか。幸福するのは自分で掴み取るもんだ。逆に言えば僕みたいな人間が享受でき

るほど甘いもんじゃねえんだよ」

そこまで言つて紙パックの紅茶を飲み干し、黒崎先生はゴミ箱に投げ入れた。おまえは真似するなよ、と釘を刺す前にどうして行動を改める努力の方をしないのか。甚だ疑問でならない。でも、そこが何処か可笑しくて笑つてしまふ。

「なら、先生を幸せにするのは私ですね」

「なんでだよ」

「() ということですよ」

いつものように机の上に出した進路希望調査票。

第一希望『先生のお嫁さん』と書いた。

第二希望『教師』と書いて、黒崎先生に突きつける。

黒崎先生は思いの外、びっくりしていなかつた。

「書き直せ」

「先生は生徒の味方じゃなかつたんですか」

「いやもう第二希望だけでいいだろ。大人を揶揄うなよ。本気にするぞ」

どうやら黒崎先生は冗談だと思つたらしい。

それなりに勇気を出して、告白紛いの真似をしたのに。

その割に顔が赤くて、動揺してるのが丸わかりだ。

「冗談じゃないですよ。でも、進路希望調査票に『先生のお嫁さん』と書くのはやめておきます。その代わりに今度、婚姻届を書いて出しますから」

トドメの一撃に先生はたじろいだ。

自宅警備員と新入り

白崎翔子と再会したあの日から、彼女を夢に見る。

夕暮れの学校の教室で翔子はずっと僕を見つめていた。

他の生徒達が「先生また明日」と告げて帰って行く中、もう一人少女が残る。

金髪の不良ギャル娘が僕に駆け寄って来た。そのまま腕に絡みついて人懐っこい犬のようにじやれつくのは、蒼山美羽という女子生徒。

対抗するように反対側の腕に翔子が抱きついて来た。

『先生、今日は何処行く?』

『蒼山さん先生にくつつきすぎです』

『えー、別にいいじゃん』

『よくないです!』

数秒もすると喧嘩を始める二人を最後に見てから、教室に残っていた連中が出て行く。あいつらまたやってるよ、と呆れやら諦めやらを含んだ視線を向けて、すぐに興味

を無くしたように教室を後にした。

『先生は私の未来の旦那様ですから』

進路希望調査票の件以来、やたらとくつついてくる翔子はそう主張する。対して美羽の方は特に気にした様子もなく否定する。

『それって白崎さんが言ってるだけでしょ』

事実を突かれて僅かに動揺するも、翔子は折れなかった。

なおのことキツく腕を抱き締める。

そうすれば、女子高生の中でも比較的大きな果実が押し付けられるわけで。

僕の中の獣が、とんでもない化学反応を起こした。

『先生は私と蒼山さんどっちが好きなんですか!?!』

『先生はあたしと白崎さんどっちが好きなの!?!』

夢にまで見た夢のような展開に僕は理解する。これは夢だと。

蒼山美羽はどちらかというところツンデレだし、こんな積極的にデレデレしてくるような性格ではなかった。

白崎翔子はあの件以来、抑揄うような態度で僕に接している。

故に夢、明晰夢というやつだろう。

『教師が生徒個人を贖済するのはなあ』

生徒とは分け隔てなく接したい。差別もなく、区別もなく、平等に。しかし、そうならないのが人情というもので既に二人は自分にとつても特別な存在となりかけていた。

『ふふ、そうやって必死に腕を押しつけて堪能しようとしているところが可愛らしいですね』

明晰夢と判明してから、ちよつとくらい触つてもいいんじゃないかなーという欲望が翔子にバレる。流石に夢だから全てが思い通りとはいかなくても、どうやら彼女は夢の中でも彼女らしいことに安堵する。

悪戯っぽい笑みを浮かべたかと思うと翔子は僕の耳に口元を寄せて。

『そんなに触りたいなら、揉んでみますか？』

とんでもないことを言い放った。

『もう、先生がつつり見過ぎですよ。本当に先生は変態ですね』

驚いて教え子の胸を直視した僕に甘ったるい声が誘惑するように耳朶を打つ。

揉むべきか、揉まないべきか、悩んでるところで翔子は宣告する。

『残念ですが先生、時間切れです』

その言葉を最後に、柔らかな感触が頬に触れた。



「なんだ夢か……」

夢で良かったような良くなかったような複雑な気持ちになりながら目蓋を開ける。元生徒を相手に淫夢を見てしまったという罪悪感……は今のところない。あるのはもつと見ていたかったという欲望のみ。

そんな僕の視界には見慣れた天井と、見慣れないけむくじやらの姿がある。

「わふっ」

一吠えすると長い舌を伸ばしてベロンと頬を舐めてきた。これが美女なら良かったのだが、鬱陶しいので手で押し返すと今度は手をペロペロと舐められる。

「つていうか、おまえ誰だよ」

「わふっ」

犬つころの毛並みは白を基調とした黒い模様、シベリアンハスキーという犬種に間違いはないだろう。特に犬の中で好きな犬種だったためによく判る。——のだが、何故ここにいるのかが判らない。

「取り敢えず、どうすつかなあ」

先日、ラブコールが約二名に増えたため最終手段で切っておいたスマホの電源を入れる。すると何件ものメッセージがSNSに、着信履歴が百件ほど残っていた。

家族からの連絡を見ればシベリアンハスキーの件は容易に肩がつく。

義母のメッセージを見てみれば、犬を貰ったという話が書き置きしてあった。

雄の『ティーチャー』と雌の『シヨコラ』らしい。

生後半年程で白崎さんから貰ったと明記しているあたり、この犬ところ達の名前を考えたのは翔子以外にあり得ないことがわかる。とんでもない嫌がらせだ。

僕はすぐにクレームの電話を入れた。

『ふふふ、先生から連絡をくれるなんて珍しいですね』

開口一番第一声がこれだ。

翔子のやつ、わざととぼけている。

「何の件か判るよな?」

『さあ、何の話でしょう。もしかして私と結婚してくれる気になりましたか?』

何故、こんな色気も何もない状況で求婚しなければいけないのか。しらを切り通すつもりの彼女に僕は用件を突きつけた。

「犬だよ。おまえから貰ったって話だけど」

『ペットの話ですか。花蓮さんが欲しいというのである程度躰がされている生後間もない子をうちの系列から譲らせていただきましたがそれが何か?』

黒崎花蓮、僕の義妹の名前だ。

一応、兄妹ではあるものの仲は良くない。

「翔子、おまえあの犬の名前はなんだよ」

『ふふ、いい名前でしょう?』

「いい名前っておまえなあ……」

『だって先生ったら私のこと放り出して何処かに行ってしまうんですよ。ならせめて仮初でも一緒にいたいと思っってはいいませんか?』

いじらしい態度で告白してくるが、その声は少し震えている。泣いているのではない。揶揄っているのだ。その証明に翔子は続けてこう言った。

『“先生” ったらすごくエッチなんですよ。“シヨコラ”のお尻ばかり追いかけて』

「犬の話だよな?」

『あら、先生には心当たりが?』

これ以上名前の追及をすると危険そう。

「もういい。切るぞ」

『待つてください先生!』

翔子に問い詰めても無駄なことがわかり、諦めて切ろうとすると慌てたような声が僕を引き止めた。

『私がどうして犬を送り込んだか知りたくありませんか?』

義妹が欲しいと言って、簡単にやるほど仲が良いのかという疑問が浮かぶ。その疑問は正しい。いくら友達との頼みとはいえそんな気軽に犬を紹介するなんて、ペットショップの店員でもあるまいし。

「ほう、聞こうか」

いつでも通話を切るボタンを押す準備はしている。

くだらない理由だったら切る。

『実は花蓮さんが犬を飼いたいって母親に相談したらしいんですが断られたらしいんです。世話もしないのに飼うのは難しいって』

「まあ、あいつの性格からしてそう長続きするとは思えねえなあ」

そんな裏話があったことに一人頷いていると、翔子は辛辣に言い放った。

『ただでさえ犬より飼うのが難しいのがあるのにこれ以上は無理だつて』

「……ぐくふっ!？」

もしかしなくても自分のことだろうか。

現実的な評価に直接言われたわけでもないのに胸が痛む。

そんな僕の反応を気にせず、翔子は言葉が続けた。

『そこで花蓮さんは言いました、あのロクデナシ追い出せばいいじゃん。それに対し

て母親はお兄ちゃんを更生させたら考えてあげると言ったららしいです』

こうして絶対不可能な条件を突きつけられたらしい義妹だが、ならばもう既に犬を飼うという結果に至っているのは何故かと疑問を覚えていると、翔子は更にこう付け足した。

『その話を聞いた私はすぐに考えました。先生が家から追い出されず、花蓮さんが犬を飼える素晴らしい案を。そうして私はお母様の説得のために家に赴き「お兄さんを更生させるまず第一歩に犬の散歩をさせてみてはどうか？」と提案したんです』

「おい待て、まずそれには問題があるだろう。引き籠もりが外に出れると思うのか？」
『だって先生、夜にはコンビニに買い物に出てるじゃないですか』

——何故知ってる。

怖いので深くは追及しないでおくが。

『それに先生は引き籠もりなんかじゃなく働かないだけです。外に出れないわけじゃないでしょう？』

まるで見透かしたかのような翔子の言葉に僕は納得した。

そう、別に外に出れないわけではないのだ。

働きたくないだけで。

もう一生、楽しんで過ごしたいだけで。

「だけど問題は解決してないだろう。僕は犬の散歩なんてやらないぞ。時間の無駄だ」
『犬の散歩が嫌なら私に首輪をしてリードを着けて散歩しますか?』

「……しないに決まってるだろバカ」

ちよつと悩んでから通話を切った。

——タツタツタツ。

廊下を軽い何かが駆ける。爪がフローリングを叩く音がして、その音はやがて僕の部屋の前で止まった。カリカリとドアを引っ掻く音がしたかと思うと僅かに空いた隙間から黒っぽいシベリアンハスキーが姿を現した。その口には首輪が啞えられており、そこから垂れたリードが引き摺られていた。

「ワオン！」

啞えていた首輪を差し出すと僕の足元に落とす。どうやら散歩に連れて行って欲しいようだ。

「クウーン」

「ウオン！」

黒っぽいのがティーチャー、白いのがシヨコラ、二匹に首輪を着けると嬉しそうにグ

ルグルグル僕の周りを回った。

「ちよつ、待てつて、着替えるから」

ちよつとコンビニに行くだけ。コンビニに行くだけだ。そう言い聞かせて、犬達に一时间も引き摺り回されてしまった僕はもう二度と散歩には連れて行つてやらないと誓った。